

古典文学教材としての『竹取物語』 —教科内容学からの授業デザイン—

福田景道*

Akimichi FUKUDA

“Taketori-Monogatari” as Classical Literary Texts : A View from the Study on Teaching Contents

要 旨

中学1年用の古典文学教材『竹取物語』の本文には、初期の物語文学の性質として、不完全、説明不足、不整合などの瑕疵が認められる。これをかぐや姫出現場面、富士語源譚、石作の皇子の造型に照らして検証すると、単純な齟齬を端緒に古典文学の深奥に触れられる例、複数の行間読みが成立する例、矛盾解消の方向性が一様ではない例が指摘できる。これらに教育実践の場で担当教師が対処する余裕はないので、教科内容学の立場から対処できる資料を提供する必要がある。その過程の中で、不完全、説明不足、不整合は実は作品世界を豊かにする契機であることが明らかになる。さらに、新しい学術的成果を活用して「古典に親しむ」方向、文学として鑑賞できる方向に授業をデザインすることにも繋がると思われる。

【キーワード：古典文学教材、かぐや姫、富士、士に富む、石作の皇子、仏の御石の鉢、教科内容学】

序

実践的教育力や教師力の育成を旨とする教員養成系学部・同大学院にあっては、教科専門科目も純正な専門的学術的な領域にとどまることなく、教育実践をも包摂する研究・教育体系としての「教科内容学」に踏み込まなければならない段階に至っている。教科教育と専門教育との接近・交流ではなく、新たな領域としての「教科内容学」の方法的確立が要請されるようになったと思われる⁽¹⁾。

このような要請に応じて、島根大学教育学部の専門教育科目「日本古典文学教材研究」を教科内容学相当科目と見なして、その現状と課題について概観し、将来的なあり方についても展望したことがある（福田景、2012）。その中で、中学校1年生用の教材『竹取物語』について、数多くの名場面や重要場面のほとんどが割愛されざるを得ず、作品全体の価値や興味が享受できない難点を指摘し、それに対処するところに教科内容学の意義があると推考した。

すなわち、文学作品の価値を真正に学修するには、生徒の実態に即して授業担当教師による適格な補充的指導が行われる必要があるが、さまざまな制約によって現実的には不可能である。担当教師に要求するには過重である。そこで、補充的指導に益する材料（作品全体の価値や本旨が感得できる資料、作品の深奥に迫る最新の研究など）の整備が必要になり、それを提供する役割を担うのが教科専門教員と教科内容学そのものなのである。特に、古典文学教材は、補充的材料なくして伝統的言語文化としての価値を生徒に伝えることは至難であろう。こ

こに教科内容学の意義の一側面が見いだせると言える。

本稿は、『竹取物語』の読解と考察によって、教科内容学の機能に迫るものである。

1. 中学校1年生用教材『竹取物語』

現行の中学校国語教科書は5種あり、そのすべての1年生用に『竹取物語』が採録されている。5種とは、『新しい国語』（東京書籍）、『中学校国語』（学校図書）、『中学生の国語』（三省堂）、『伝え合う言葉 中学国語』（教育出版）、『国語』（光村図書）である⁽²⁾。以下、本稿では発行元によって『東京書籍』『学校図書』『三省堂』『教育出版』『光村図書』と略称する。

このすべてが冒頭の本文、しかも起筆部分から「いとうつくしうてあたり」までを収載することでも一致している⁽³⁾。

それぞれが独自の方針で古典（古文）の単元を国語教育の中に位置づけているが、1年生対象であるため、「古典に親しむ」ことを目的とし、古語や文法知識の習得よりも作品世界の味読に主眼を置く傾向があるように思われる。

それは特に『学校図書』に顕著で、物語全体を注意深く読み直すことをはっきりと要求している。教科書本文で作品の深層や本質に迫るような三つの質問をした上で「古典は、普段深く考えることもなく、やり過ごしている大切な問いをいくつも問いかけてきます」（206・207頁）と作品全体の鑑賞の意味を伝える。

『東京書籍』には、古典学習開始に先立ってその目的が明示されている。

そこには、自然の光景や人間をめぐる出来事が多様

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

に描かれていて、今の私たちも共感したり学んだりすることのできる内容が数多く取られています。一方、生活の仕方や社会の仕組みが変化したために、現代の感覚とは少し異なる内容も含まれています。しかし、そういうものを知ることで、感情が豊かになったり思考の幅が広がったりするのは、古典は、人間としてどう生きていくかを教えてくれる知恵に満ちています。(96頁)

現代との同一性と異質性を知ることで、感情や思考の成長が促されると教える。作品として読むことを前提としていることになる。

『三省堂』に「古典には、その当時の人々の生活や心情、ものの見方や考え方が描かれています。『現代とは違っている』と思うことや、反対に『現代と変わらない』と感じることなどに気をつけて、『竹取物語』を読んでみましょう」(24頁)とあるのも現代との対比から文学作品としての興趣に導こうとしているように思われる⁽⁴⁾。『東京書籍』と同断である。『教育出版』の「物語は、不思議なこと、おもしろいこと、悲しいことなどを、心に響くように伝えます」(72頁)もこれに近い。

叙上のように、近年の『竹取物語』教材は、古文や古語への入門よりも、文学としての面白さや意義に気づくことで「古典に親しむ」ことを重視する傾向があるように思われる。『学校図書』や『教育出版』で特に絵本の「かぐや姫」と対比させるのも、既知の物語であることによる親しみが期待されていることだけでなく、絵本よりも深い古典に気づかせるためでもあるに違いない。『竹取物語』は文学として興趣が評価され、初期の古文教材に相応しいと判断されていると推断される。現代語訳で全編を読むことが薦められていることが少なくないのもそれを傍証するであろう。

しかし、現代語訳ではなく古来の本文を載せるからには、古文そのものが無視できるものではない。古文であるからには現代文のように抵抗なく読めるものではない。もしも中学1年の入門段階で古文の解釈に拘泥してしまうと文学としての享受を阻害することになる。入門期に適する読み方、古文としての古典文学の読み方について、教科内容学の立場から考察するのが本稿の目的である。

そこで、以下に純粋に教室で古文に対峙した場合、簡単には解釈できそうにない問題を孕む3箇所を取り上げて、教科内容学がいかに貢献できるかを検証してみたい。まずは、5社すべてが取り上げる冒頭に注目する。

2. 竹取翁はかぐや姫の籠もる竹を切ったか

すべての中学校1年国語教科書に共通して採録されるのは次の部分である。

いまは昔、竹取の翁といふもの有りけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむひと筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それ

を見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてりたり。⁽⁵⁾(3頁)

この部分が例外なく取用されるのは、作品の冒頭、事件の発端としての重要性によるだけではない。難解な古語や複雑な文脈が含まれず、音読にも適する平明な文章であることも入門的教材に相応しい特徴となる。古文の表現に慣れ、文意を理解する以外の方向に学習者の関心が向けられる可能性が極めて低いと思われるからである。⁽⁶⁾

ところが、「寄りて見るに」「それを見れば」の部分に関しては、古文に慣れ親しむ以外の方向へ向かわせる要因が潜在する。そこには竹の中にいたかぐや姫を見ることができた理由が書かれていないのである。翁が竹を切ったという表現はない。光を発する竹を見つけて「寄りて見る」と竹の内部に光源があることがわかり、「それを見れば」鎮座するかぐや姫の姿が確認できたと書かれているだけで、竹が切られたに相当する字句は存在しない。

ここに古文教材または『竹取物語』の特色、すなわち、本文に十全な説明がないところを読者の斟酌や想像に委ねなければならないという特色の典型が認められる。中学校の段階で、古典文学の本文異同の問題、作品解釈と享受の問題に立ち入って考究する余裕はない。現行の教科書はすべてこの点に言及せず、逐語訳を付すに止める⁽⁷⁾。そこで、教材として取り扱われることを前提に、作品世界の自然な流れで竹が切られたと仮定すると、次のように本文の行間を補うことができる。

「寄りて見るに、筒の中光りたり」は、近づいて見てもどうして竹の根元が光っているのかが分からなかったので、翁は竹の光っている部分の周辺を切ってみた。そうすると光が突然強くなり、光源が筒の中にあることがわかった。

というような文章の省略であり、「それを見れば」以下は「その光源の方を注視するとかぐや姫がいることがわかった」という趣旨であるとする、一応は筋が通る。

または、「寄りて見るに」のところはそのまま、「近寄っても筒の中から光が発せられているとしか考えられないが、不可解なので」の意に解し、「それを見れば」のところを次のような文章の省略と考えるべきかもしれない。

(筒の中が光っているのが不可解なので)翁は竹を切ってその中をよく見ると、かぐや姫が座っているのがわかった⁽⁸⁾。

結局、「寄りて見るに」か「それを見れば」のどちらかに「竹を切る」動作が含まれていると考えると違和感なく読み進められることになる。現『竹取物語』の本文には「翁が竹を切る」が省略されていると解して処理するのである。竹を切る以外にかぐや姫を発見する手段が想定し難いからである。

ところがその想定に反して、本文中に竹を切ったとの記述がないことは竹を切る行為がなかったことを意味すると考える解決方法が紹介されることがある。たとえば、姫のいた竹の根元は、筒の片側が削がれていて、そば

に寄った翁には、まぶしい輝きの中、じかに姫の姿が見えたのではあるまいか。(中略)⁽⁹⁾一部が開いていても「筒の中」であることに変わりはない。(妹尾, 1988)

という解釈である。竹を切ったという表記がない点を優先して読んだ場合の1つの帰着点が示されたと言うべきかもしれない。

それに対して、この新解釈を「作品世界の秩序そのものから乖離した視座」として否定し、「寄りて見るに」の次に当然あるはずの竹を切る行為が省略されたと解する以外にないとの見解が提示された。

当然、翁は、竹を切り、件の^{ちいきこ}小子を見出したのでなければならぬ筈だけれども、(中略)重要であるのは、ここで、書き手は、そうした次元の事実を省筆し、構成しているという内実なのだ。翁は、根本の光る竹を発見し、興の惹かれるままに近寄って見ると、筒の中に「三寸ばかりなる人」がいたと進展せしめるのであり、要するに、

「……………あやしがりて寄りて見るに」と記して飛翔、「筒の中光りたり」と連繋させた叙述論理というものを透視する必要がある。翁は、どのような形であれ、姫を傷つけることなく切っていたという諒解を前提とする対処なのである。(小谷野, 1988)

あまりにも自明な行為は省筆されても支障はない、万人が了解していることは記す必要がない、という趣意に通じるかと思われる。切断された竹筒の中に女兒が端座するさまが読者の脳裏に必ず映し出されるとすれば、取って「竹を切った」と書き留めるには及ばないとも言える⁽¹⁰⁾。

両様の読みは、「筒の片側が削げていた」か「翁が竹を切った」かのいずれかを補うかの違いであるとも言える。そこで、補うべきものはない、そもそも何も省略されていないと仮定すると、藤井貞和の解説に到達する。

筒の中が光っている。その段階ではかぐや姫はまだ見えない。(中略)目をこらして見ると、光の中にかぐや姫がだんだん見えてくる。筒がすきとおるように光ともにかぐや姫は出て来た。(藤井, 1985)と読み解かれる。理屈にあわない「神秘的誕生」の表現であるところにこそ意味があるという立場である⁽¹¹⁾。これには高橋亨も賛同した(高橋, 1987)。

ここまで来ると、単に作品内の1文の訳出の相違にとどまらない。物語世界の真髄に関わらなければ解決できない問題となる。本文解釈の奥深さが看取できるであろう。『竹取物語』の面白さに気づく機会はこのようなところにあるのかもしれない。

しかし、古文教材としてこの部分を解釈する際には、事情は異なる。中学1年生の読解力や読書経験をもって、藤井のような高度な解釈に到達できるのであろうか。「どのような形であれ、姫を傷つけることなく切っていた」と説明されて簡単に納得できるであろうか。初対面に近い、新規な外貌をもつ古文そのものに立ち向かい、克服する作業を開始した時点では、語句のそれぞれの意

味を捉え、文章を逐語訳することに集中するはずである。その際には、省筆説に納得して読み進める者もいるであろうが、省筆ゆえの違和感や矛盾に捕らわれる者も現れるに違いない。「筒の片側が削げていて、じかに姫の姿が見えた」または「筒が透き通ってきて光とともにかがや姫が出てきた」に納得することも難しいであろう。授業担当者が、行間の読みを懇切に説明したとしても、一端生じた違和感を消し去ることは必ずしも容易ではないと予想されるし、教室にはそこまでの時間的余裕はないはずである。

ここでは、どのように読むのが正しいかを判定しようとしてはいいない。本文に書かれていない要素を補足することの難しさを指摘したのである。古典文学教育においては、書かれていない部分を古人の常識や大人の読書力を用いないで対処しなければならない点にも注目しておきたい。

3. 「富士」の語源は「土に富む」か

作品末尾にも、直訳したのでは意味が分かりにくい箇所がある。富士山の語源が説明される一文である。かぐや姫から贈られた「不死の薬」等を駿河国にある高峰の山頂で焼却せよとの勅命を受けて、

そのよしうけたまはりて、^{つはもの}兵士どもあまた具して、^{のほ}山へ登りけるよりなん、その山を「^{ふじ}富士の山」とは名づけける。(76頁)

と、実際に薬を燃やしたことを記述しないで、富士の語源が説かれている。

薬の燃焼が描写されないのは、「諒解を前提」とする「省筆」と考えて支障ないであろう。直後に「その煙、いまだ雲のなかへ立ち昇るとぞ、言ひつたへたる」とあることによっても、燃やされたのは自明となる。解釈が分かれる余地はない。それに対して、富士語源説の論理展開は自明とは言い難い。引用の一文の構成からは「^{つはもの}兵士どもあまた具して山へ登りける」が「^{ふじ}富士の山」と名付けた理由ということになるが、「ふじ」に結びつく言辭はどこにもない。前文に「不死の薬」が多出するので、「不死」が「ふじの山」の語源であるという類推に導かれるのも看過できない。

単に本文を逐語訳しただけでは、富士と名付けられた理由は判然としないのである。

この点に中学一年国語教科書5点中2点は解決策を提示する。

『東京書籍』では、当該の本文は掲載されていないが、粗筋の部分で、

翁と姫はひどく泣き悲しみました。帝は、不老不死の薬も何になろうと言われて、おおぜいの武士たちを天にいちばん近い山に登らせて焼かせました。それからその山は、「^{つわもの}土に富む山」(武士がたくさん登った山)という意味で富士山と名付けられ、その煙が今でも立ち上っているということです。(106頁)

と、明確に説明されている。「兵士どもあまた具して山

へ登りける」から「武士がたくさん登った山」が導き出され、さらに「土に富む山」に結びつくという趣意になる。しかし、「あまた(たくさん)」を「富む」に直結させる発想は簡単に浮かぶものではない⁽¹²⁾。ここに、「竹を切る」のところで同様に、書かれていないことをどの程度まで補い得るか、という課題が伏在すると言ってよいであろう。東京書籍の教科書で学ぶ中学1年生にとっての『竹取物語』は、「土に富む」と書かれているものとして記憶されてしまうのが危惧される。

『光村図書』は、唯一物語の結末部分の本文を収載し、作品本文の左傍に付された現代語訳部分によって富士の語源を明示する。

(使者が) 兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったということから、その山を(「土に富む山」、つまり「ふじの山」と名づけたのである。(145頁)

と「兵士たちをたくさん引き連れて山に登った」=「土に富む山」=「ふじの山」という関係性が明示されている。

一方、『三省堂』『学校図書』『教育出版』は富士の語源に触れていない⁽¹³⁾。『東京書籍』と『光村図書』で学習した場合に限って、原文に書かれていない「土に富む山」説が認識されるのである。知識・素養として定着するかもしれない。

しかしながら、「土に富む」説が誤謬であるということではできない。既存の注釈では必ず紹介される旧来からの解釈の一つである。『東京書籍』と『光村図書』は、『竹取物語』原文の出典が片桐洋一校注・訳「竹取物語」(『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集12, 小学館, 平成6年<1994>刊)であることを明記しているが、その脚注部分の現代語訳には、

調のいわがさが^{つわもの}土をもたくさん引き連れて山に登ったことから、この山を「土に富む山」、つまり「富士の山」と名づけたのである。(77頁)

と記され、『光村図書』の傍注の訳に酷似する。『光村図書』の編者は新編日本古典文学全集の訳出を踏襲したのかもしれない。『東京書籍』の説明も同工と言ってよいであろう。

「土に富む」説は訳文だけを見れば、やや唐突であるが、新編日本古典文学全集本の頭注には、

読者たちは「不死の薬」を燃やしたから、「不死の山」、つまり「ふじの山」と名づけられたと説明すると予想していたであろうが、語り手はその裏をかつて、思いもかけない解釈、土を数多(富)具して登ったゆえに、つまり土に富むゆえに富士山という新解釈を提示したのである。(77頁)

と解説されている。また、最近の室伏信助の注釈には「土」が大勢山に登ったので「土に富む山」という洒落。「不死の薬」を焼いたから「ふじ」かと思う読者の予想を覆し、併せて正史の表記「富士」の謎解きをした。記録の上では『続日本紀』(延暦十六<七九七>年成立)に記載されて以来、諸書に見える⁽¹⁴⁾。

と片桐(新編日本古典文学全集)の読みに「富士」の漢字表記の説明が加えられる。さらに、「その山を『富士の山』とは名づけける」の後に「その煙、いまだ雲のなかへたち昇るとぞ、言ひつたへたる。」(76頁)と続いて作品が完結することに注目して、

「不死の薬」を焼いたので、煙が立ち上るようになり、「不死」だから永遠に今日まで雲の中へ立ち上っているとこじつけたわけである⁽¹⁵⁾。

という雨海博洋の解釈もあり、再度「不死」説が顕在化するとも考えられる。野口(1979)は「不死」→「富士」→「不死」と両説の間を読者に往還させるところに作者の技量と作品の価値を見いだす。

結局、「ふじ」の語源を「土に富む」とすることは誤りとは言えず、語源説を採る『竹取物語』の魅力を知ることにも繋がるのであるが、教室でそれを説くのは簡単ではないであろう。

そもそも「土に富む」説は江戸時代に発し、小山儀(安永3年<1774-1775>没)の遺稿『竹取物語抄』や田中大秀の『竹取翁物語解』(文政9年<1826>成立)に考察されたが、正否を決する論拠を得ないままに現代に至り、「話のおちとしては面白い」⁽¹⁶⁾という種類の支持はあるが、「土」を「つはもの」と訓む例の欠如等によって定説にはなっていない⁽¹⁷⁾。出雲朝子によって、古代の「土」は男子の意であって兵士ではないことが説かれて(出雲, 2010)、さらに定説から遠ざかったようである。同様の観点から、「土に富む」説を否定した金関丈夫は、「具し」と「ふじ」を結びつけて第三の語源説を提起した(金関, 1970)。もはや教室で取り扱える限界をはるかに超えているであろう。

また、新日本古典文学大系の脚注に「古本系では不死の薬を焼いたことが山名の起源だが、通行本では兵士が大勢登ったことが起源となる」(76頁)と記されるのも無視できない。本文の異同が富士の語源に関わることが顕現している。

「古本系」とは個人蔵『竹取物語』(文化12年<1815>書写奥書本。通称「新井本」)を意味すると言ってよく、それ以外の諸本(「通行本」)とは明らかに別系統であるが、本文の乱れを合理的に改訂したところが多く通行本よりも信頼できるわけではない。『竹取物語本文集成』(平成16年, 勉誠出版刊)によると、新井本(古本)の富士語源の箇所は「つはものどもあまたぐしてなむ、かの山へはのぼりける。そのふしのくすりをやきてけるよりのちは、かの山の名をばふじの山とはなづけける。」となる。通行本にはない「その不死の薬をやきてけるより後は」があることにより、「不死」が語源に定まるが、興趣を欠いてしまう。合理的な改変なのかもしれない⁽¹⁸⁾。

以上のように、『竹取物語』の富士の語源を「土に富む」とするのは、長大な研究史を踏まえたものであり、しかも決着したとは言えないのである。『東京書籍』や『光村図書』を用いた際に生じかねない違和感は、実は古典本文解釈の奥深さを示すものであった。これを簡明にまとめて資料として提供するのには至難で、教科内容学の領域に属するのではないかと思われる。

4. 石作の皇子は愚劣か

次に、求婚難題譚の部分から石作の皇子の行動を取り上げる。五貴頭ごきとうの失態は「人をだますことによって何かを手に入れようとする人間の醜い側面」(『東京書籍』103頁)と教科書の上で断じられ、石作の皇子個人については「山寺の古鉢ふるはちに間に合わせようというのだから、実にせこい」とまで言われる⁽¹⁹⁾。上坂信男も次のように酷評する。

女を得るためには、大和国十市郡ひんずるの山寺の寶頭ひんずる尊者の前なる石の鉢てんじくを「天竺てんじくに二つとなき鉢」と偽り欺いてはばからない。これでは、求婚もまったくのエゴの発現というよりほかないものである。姫をしてこうしたエゴを看破させ、求愛に応じられようもない結果に筆を運ぶ作者の物の考え方を第一に印象づけられる。(中略)煤けた石の鉢すずを持帰ったところに、エゴばかりか、皇子の無教養さをも作者は揶揄しているのだろうか。⁽²⁰⁾

この皇子の評価は否定的なものしかない。卑劣、無恥、愚劣などの印象に覆われる。絵本や児童書においても同様であろう。しかし、古典の『竹取物語』には「醜い側面」や「エゴ」では包含できない石作の皇子像が読み取られるように思われる。

まず、石作の皇子の物語についてはいくつかの疑点があり、無視できない。他の4人の貴公子たちの物語に比してあまりにも短い、皇子にも姫にも敬語が使われない、行動が安易すぎる、など、その異質性が簡単に列挙できる。なぜ、このような異質な求婚者が設定されたのであろうか。安藤(2011)には、求婚譚には書き換えられた証跡があり、石作皇子物語に最も古い形態が残存していると説明される⁽²¹⁾。そのために結果として生じた異質性ということになる。そうであれば、なぜこの部分だけが書き換えられなかったのであろうか。

三谷(1988)は、この部分の和歌の多さに注目する。『竹取物語』中の15首中の3首が集中し、しかもすべての歌に懸詞が含まれが、これは物語全体の4首のうちの3首を占めると指摘する(161-162頁)。極端に短い1節の中での偏りであるだけに軽視できないと思われる。また、皇子の愚劣さが説かれる際に詠歌が取り上げられることはほとんどなかったように思われる。そこで、詠歌に注目して、石作の皇子の造型について再考してみたい。

『竹取物語』にはこの皇子の約3年間の動向が次のように要約して語られる(13・14頁)。

「仏の御石の鉢」「天竺てんじくに二となき鉢」の取得という無理難題を果たされた石作皇子は、天竺てんじくにしかない稀観品であっても何とか入手したいと思いを巡らせた結果、「心の支度したくある人」であるので、

天竺(ふたつ)に二となき鉢はちを、百千万里(ばんり)の程ゆ行きたりとも、いかでか取るべき

と不可能であることを悟り、欺瞞への道を選択する。かぐや姫には

今日けふなん、天竺(てんじく)へ石の鉢はち取りにまかる

と偽りの伝言を残しておいて、3年ばかり経ってから再び姫の前に偽物の鉢を携えて姿を現す。ここまで要約的に簡潔に叙述されてきたのが、かぐや姫と皇子とが対面する場面になると、詳しい描写に移行する。この場面を描くためにそれまでの経緯が略述されていたと言っ

てもいいかもしれない。下に対面場面を引用する。
大和国十市郡(やまとのくに)とをちにある山寺こほりに、寶頭ひんずる尊者まへの前なる鉢はちの、ひた黒ぐろに墨すみつきたるを取りて、錦にしきのふくろ(いれ)に入いれて、造り花の枝つくにつけて、かぐや姫ひめの家みやに持もて来きて、見せければ、かぐや姫ひめ、あやしがりて見るに、鉢はちの中に文あり。ひろげて見れば、

海山(うみ)の道(みち)に心を尽つくしはてないしのはちの涙(なみだ)ながれき

かぐや姫ひめ、「光ひかりやある」と見るに、螢ほたるばかりの光ひかりだになし。

をく露(お)の光(ひかり)をだにもやどさましをぐら山やまにて何もとめけん

とて、返し出いだす。鉢はちを門かどに捨すてて、この歌の返しをす。

白山しらにあへば光うの失うするかとはちを捨(すて)てもたのまる、かな

と詠よみて、入いれたり。かぐや姫(かへ)、返しかへもせずなりぬ。耳みみにも聞き入きざりければ、言いひか、づらひてかへりぬ。(13・14頁)

この後に、鉢を捨ててからもう一度言い寄ったのを「はち(恥)を捨つ」の語源とすると紹介されて、皇子と鉢の物語は終了する。

ここに和歌3首が含まれる。懸詞が駆使されている。しかしその巧拙がかぐや姫の判断に関係したという筆致は見られない。姫が「光やある」(光はあるか)と鉢を見ると「螢ばかりの光だになし」とわかって偽物であることが露呈し、その鉢の返却をもって皇子の求婚は拒否されたという展開になる。この限りでは和歌の果たす役割は大きくない。

ところで、この展開には不自然な点がある。姫が「光やある」と確認するタイミングが遅すぎるのではないか、という点である。数行前に「かぐや姫の家みやに持もて来きて、見せければ」とあり、皇子は鉢を持参してまず見せたのである。その直後には「かぐや姫、あやしがりて見るに」と姫が鉢を目視する行為が描かれている。この段階で鉢が光を発していないことは判明していたと考えざるを得ない。鉢を受け取ってその中の文と歌とを読んでから改めて光の有無を確認するのはあまりにも遅い。普通の行動ではない。

光がないのは分かっていたが、一応手紙を読んでみて、それから入念に鉢の中を点検して螢光ほどの微かな光さえないのを確認したということであろうか。または、鉢の中の手紙を取り出したのは女房か女童のような人物で、彼女は光のないことを知りながら敢えて姫には報告しないで、手紙を手渡したということであろうか。しかし、

最重要点であるはずの光の存否についてまったく触れな
いで、鉢のみがその場の中心に置かれている情景が持続
するのは不審である。やはりかぐや姫は早い段階で一度
は鉢の中を見ていたのであろう。それから間を置いて改
めて光を探したと読むしかない。

なお、新井本（古本）が「かぐやひめあやしがりて見
るにはちの中に文あり」を「はちのうゑに文ぐしたり」
とするのは、上の不審を解消しようとしたのかもしれない。
袋に入った鉢の上に文が付されていたという意味にも
なるので、鉢の中は見られていないことになる。しかし、
辻褄が合うだけにかえて合理的な改訂である可能性が高
い⁽²²⁾。新井本の整合性が通行本の不整合を証明して
いるとも言える。合理的な新井本の本文が不合理なもの
に誤られるよりも、本来の不合理が新井本で合理的に
修正されたと考える方が穏当だからである。不合理・不
整合と見なされなければ、意改は行われまいであろう。

しかし、それだけで不整合を認めるのも早計に過ぎる
ように思われる。そこで、通行『竹取物語』のかぐや姫
の行為に矛盾が生じない試解を、和歌の贈答を重視して
提示してみたい。これだけ存在感のある和歌がプロット
展開に無関係であるとは考え難いからである。

まず、「かぐや姫、あやしがりて見るに」とあるのだ
から実際に見たのだと考えてみたい。この場面で誰も鉢
の中を見ないのは不自然である。それでは、なぜ光の有
無や鉢の真贋について語られなかったのであろうか。そ
の場合、語るまでもなく、鉢が偽物であることは自明で
あったと考えるしかない。皇子の持参した鉢の来歴につ
いては周知されていたと判断するのである。読者は無論
知っている。同様に登場人物たちも知っていたのではない
か。こう考えると矛盾はない（かぐや姫が1首目と2
首目の間で「光やある」と再び見たことに関しては今は
触れないで後述する）。

上のように試解する根拠は、この箇所のもう一つの矛
盾にある。かぐや姫の詠歌中に「をぐら山にて何もとめ
けん」とある問題である。たとえば、三谷（1988）は、
姫が返歌に「小倉山にて何もとめけむ」といったのは、
つまり皇子が鉢を求めに行った「大和国十市郡
にある山寺」なるものが、この小倉（椋）山の山寺
であるということ、姫は前から知っていたことにな
る。もしそうでなければこの歌の意味はなくなる。
それであるのに、その辺の消息を少しも言及してい
ないのは、不用意であり、この物語の欠点を示すも
のかもしれない。（161頁）

と、不用意な失敗と論定する。

ここで注意したいのは、この「不用意」とはかぐや姫
が皇子の偽りを知る場面が書かれていないことであって、
知らないはずのことを知っているように叙す齟齬が生じ
たことではない点である。もしも不用意がなく、かぐや
姫が前もって石作の皇子の偽装行動を知っていたのであ
れば、「小倉山」を歌中に詠み込んで不自然ではない。
皇子がかぐや姫の「暴露」に驚いたような記述がないの

だから、さほど無理な推定ではないであろう。そして姫
が皇子の動向を把握していたのなら、改めて鉢の中の光
を確認する必要がないのは言うまでもない。言い換えれ
ば、姫が鉢の中の光を確認しなかったのだから、それが
偽物であることを知っていたことになり、そうであれば、
皇子が実は大和國小倉山周辺にいたことも知っていたこ
ともなるのである。作者に「不用意」があるとすれば、
前半部分に石作皇子の欺瞞が露見していたことへの言及
がなかったことに尽きる。

なお、大和国に潜んでいたことが知られたのを「ここ
ではかぐや姫は通力で鉢の出所を見破っている」⁽²³⁾と説
明する注釈もあるが、その根拠は示されない。「かぐや
姫がどうして小倉山寺の鉢だと見抜いたかは、この物語
の叙述では分からない。神通力だとすれば、他の四話と
合わない」⁽²⁴⁾という方が妥当な見方かと思われる。しか
しこれに対しても「かぐや姫が皇子の行動を見通してい
るとするのは、古形の物語が持っていた素朴さを露呈し
ている」⁽²⁵⁾とこの話のみの特性を認める立場がある。こ
れらの見解の相違は、不用意ではないと言い切ることの
難しさの反映と受け取ることもできる。また、作者が不
用意ではあっても、登場人物かぐや姫が欺瞞を見抜いて
いたという点は揺るがないことが確認できる。

さて、以上のように考えると、「かぐや姫、あやしがり
て見るに」の段階では、鉢が偽物で光を発していない
事実が認定されていたことを疑う余地はない。それにも
かかわらず、皇子の文を見た後に改めて「光やある」と
鉢を再確認するのである。不用意と言うべきはこの箇所
ではないか⁽²⁶⁾。遠回りをしたが、この読み方を前提とし
て、先に保留した「かぐや姫、「光やある」と見るに、
螢ばかりの光だになし」（14頁）を再考してみる。その
際にこの段の特徴である和歌の贈答を重視する。

まず、かぐや姫が光の有無を確認したのが石作皇子の
文の中の歌を見た上でのことである点に注目したい。こ
の歌を鑑賞・吟味して、その上で光の探索を開始したと
読み取ることができる。そうすると、詠歌が鉢の中に光
を出現させる可能性があったと理解できるであろう。し
かし、残念ながら一切の光が認められなかったというの
がこの部分の展開である。

皇子の最初の歌「海山の道に心を尽くしはてないし
のはちの涙ながれき」（13頁）は、技巧であふれている。
新日本古典文学大系脚注には、「尽くし」に「筑紫」、
「尽くし果て」に「果てない」、「果てない」に「泣いし」、
「泣いし」に「石の鉢」、「鉢」に「血の涙」が懸けら
る重層的懸詞が、下の句の「な」の頭韻とともに指摘され
る。「石の鉢」も遺漏なく詠み込まれている。当時とし
ては最先端の技巧であったと思われる（三谷、1988）。
皇子はこの渾身の技巧によって王朝人としての教養と機
知の保有を証明し、歌意で艱難をしのいだ行動力を示し
て求愛したのである。もしも思惑どおりに女の心に響い
たなら、その瞬間に鉢に光が宿ったはずである。しかし、
光は現れず、鉢は偽物のままだった。もしもこの歌がか

ぐや姫の超人間的な美意識に適ったなら、鉢はその中から光を發したであろう。実際には光らなくともかぐや姫が「光あり」と宣したであろう。しかし、光は見られず、皇子の資質がかぐや姫の配偶者に相応しくないことが明らかになったのである。

かぐや姫の答歌は、露ほどの光がないことを確認し、下の句「をぐら山にて何もとめけん」で小倉山で何を探して来たのか、3年を費やしたのにどうして僅かばかりの光を見つけれなかったのかと問うものとなる。これがかぐや姫の最終回答である。皇子がかぐや姫の相手になり得ないことが確定したのである。したがって、皇子の2度目の贈歌にはかぐや姫は答えなかった。これも技巧を用いた力作であったが、求婚の失敗が決定した後なので、答える意味が失われていたと考えることができる。

このように読み解くと、石作の皇子の行動は、偽り欺く性質のものではなく、^{みやび}雅な美意識に基づき、詠歌の力によってかぐや姫の心を動かそうとするものであった。そのため3年を費やしたのである。王朝的正攻法で難題に挑んだと言える。歌の力が運命を決するこの段は歌徳説話の話題型に関係があるのかもしれない。すべては歌の巧拙にあって、鉢の真贋や皇子の行動の正邪は判定基準ではなかったとも考えられる。

野口(1979)は、この物語を「石作の皇子が偽物の鉢をもっともらしく飾り立て、苦心のほどを訴える歌を添えてもたらしたのに対して、かぐや姫は一目でその偽りを見抜き、手厳しい歌によって彼の求婚を^{しりぞ}却ける」とまとめる(126頁)。これを「一目でその偽りを見抜き」ではなく「皇子の詠歌が鉢を本物に変えるほどすばらしいものではなく」とするのが本稿の解釈である。

そもそも皇子は世間を欺こうとしたのであろうか。皇子が騙したとも、策略があったとも『竹取物語』には書かれていない。皇子は実は騙していないのかもしれない。騙し通す気はなかったとも考えられる。偽物入手の杜撰さからは3年間も世間を欺き続けることができたとは思われない。偽物であることを前提に、歌力で女の心中の鉢を本物に転じようとしたと解釈できる。

以上の私解によれば、石作の皇子の物語に「不用意」や矛盾はほとんどなく、難題に王朝的な和歌の機能を用いて正攻法で挑む求婚の方法は、軽率でも拙劣でも愚劣でもないことになる。作品内に書かれていないことをどのように扱うかによって、登場人物の印象が一変する例となるであろう。

絵本の「かぐや姫」には、和歌の贈答はなく、姫が自身で偽物と見破る設定になるのが、通例である⁽²⁷⁾。石作の皇子は愚劣な人物として固定されている。これを読書経験として保有する学習者が、古典文学教材としての『竹取物語』に出会うとすると、皇子の嘘が露呈する経緯に歌の応酬が中心的に記述されている点に意外な感をもって注目するはずである。さらに、渾身の詠歌によって女性の心を動かし婚姻を成立させようとする正統派の王朝びとであったといえれば物語の印象は一変するのではないだろうか。

結

石作の皇子に果たされた難題、仏の御石の鉢は、光を發するものであった。他の4つの難題も光るものとされる。彼らは等しく丸く光るものを求めて旅立つのである(高橋, 1987)。5人の貴公子は、丸くて光る満月の象徴を探しに行ったのかもしれない。もしもそれを持ち帰ることができたとしたら、異界に到達できたことを意味し、かぐや姫の故郷である月世界という異界にも行き得ることが証明されたかもしれない。地上と異界とを往還するかぐや姫と結婚できるのは、異界に行くことの許された特別な人間でなければならないであろう。5つの難題はそのことを試すものであったと考えられる。

このような読み方を認める根拠は、『竹取物語』を現実世界と異界とからなる二元的世界構図によって読み解くシステムの先行研究に提供される(高橋, 1986; 鈴木, 2001; 仁平, 2006)。そうすると、求婚譚の物語はさらに豊かで興味ある読み方が可能になるであろう。

『竹取物語』の不完全さ、矛盾、欠落などは、現在までに累積された研究成果を活用することで斬新な読み方を提示し、古典文学の面白さを増進し、古典離れを減少させる糧となる。教員養成課程の教科専門系研究は、教科内容学としてそれに貢献するものである。『竹取物語』の内容研究のための文献資料は膨大である。奥津(2000)・島内(1992)のような大著もある。すべて『竹取物語』の新しい読み方を呼び起こす⁽²⁸⁾。

竹取の翁が竹の中のかぐや姫と対面する場面は、書かれていないところを、先行研究をもって補わなければ解釈できなかった。そのためには多量多彩な研究の蓄積を教材としての古典文学の解釈に適するように再構成しなければならない。

富士山の語源として、本文に書かれていない「土に富む」説が有力になった事情を探究することは、作品の読み方や語彙についての認識を深めるのに有効である。しかし、その探究を教室で行うには、そのための資料が必要になる。

石作の皇子は、安易に偽物を用意して人々を欺く愚劣な人物として固定的に理解されているが、本文の些細な矛盾に注目して再考すると詠歌によって目的を達成しようとする正統な王朝貴顕である可能性が見いだせる。その根拠になるのは『竹取物語』全体の捉え方に関する先行研究である。

そして、3箇所すべてに異界と現実世界との対照構図が関与している。光る竹筒は異界と地上との境界そのものであり、富士の煙は異界に届くものである。専門的研究と教材研究とを教科内容学が連関させたとき、新しい授業をデザインする材料が調うのである。

注

- (1) 「教育内容学」の意味とそれをめぐる諸問題については、増井 (2009), 増井・西園 (2011), 横原 (2012) など参照。
- (2) いずれも平成23年2月文部科学省検定済みで、平成24年1月または2月発行のものである。
- (3) 平成24年度版より、『東京書籍』のみそれに続く1段落をも取めるが、それまでは5社の冒頭掲載部分は完全に同一であった。
- (4) 三省堂の平成18年版『現代の国語1』には「古典には、その当時の人々の生活や心情、ものの見方や考え方が描かれています。／『竹取物語』からは、昔の人々が、月をこの世とは違うふしぎな世界と考えていたことがわかります。そこには、あこがれやおそれがあったのかもしれませんが。少なくとも、月に対する思いや考えは、人類が宇宙空間を飛行する現代とはずいぶん違っていたことでしょう。反対に、『不死の薬』を形見として残そうとしたかぐや姫の行為や、愛する者との別れを「血の涙」を流して悲しむおじいさんとおばあさんの姿から、今も昔も変わらぬ人間の真実の姿を読み取ることもできます。／古典にふれることは、現代に生きるわたしたち自身を発見することにつながるのです。」(60頁)とあり、現代との相違と共通性を感得するところに古典学習の核心を認めている。これが「古典に親しむ」目的に繋がると思われる。
- (5) 『竹取物語』本文の引用は、堀内秀晃校注「竹取物語」(『竹取物語 伊勢物語』新日本古典文学大系17, 岩波書店, 平成9年<1997>刊)による。
- (6) たとえば、平成10年の中学校学習指導要領に関して、「古典の指導のねらい」として「古典を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てること」がまず挙げられ、それを具体的に指導するには「仮名遣い、語句や語彙、係り結びなど古文の理解に必要な基礎的な事項」などは「細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲で適切に指導することが大切である」と解説されていた(『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—国語編—』平成11年<1999>, 東京書籍刊。102~104頁)。「これらの言葉のきまりを学習することにより、生徒が『古典』の学習に過重な負担感を抱いたり、『古典』への興味・関心を失ったりすることのないように十分に配慮する必要がある」(河野庸介著『新国語科授業の基本用語辞典』平成12年<2000>, 明治図書刊。95頁)のための指導である。この「ねらい」に、『竹取物語』冒頭の平易簡明さが符合しているであろう。ここに教材類用の一因が所在し、その流れが現在にも及んでいと推断できる。
- (7) 「近寄って見ると、筒の中が光っている。その筒の中を見ると」(三省堂), 「近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると」(東京書籍・光村図書), などの訳文が付されている。
- (8) 妹尾 (1988) はこの部分を「姫はその身の輝きのため、筒の中にも姿が外に透けて見えていたので、翁は竹を切る前に中の姫を発見できたのかもしれない。そうであれば、駄洒落を發した後、丁寧に竹を切って中の姫を取り出したことになろうか。」という試解を示す。
- (9) 「中略」部分には「ちょうど北山の大きな木の空洞に住んだ仲忠母子の超ミニ版のごとく、姫は竹筒を家にして坐っていたというわけである。」とある。
- (10) ほとんどの注釈書はこの部分は語句を補わずに直訳するが、野口元大校注『竹取物語』(新潮日本古典集成, 昭和54年<1979>, 新潮社刊) 9頁には「それを見れば」の右側に「〔切って〕筒の中を見ると」と傍記され、「切って」が補われている。
- (11) 「『竹取物語』の冒頭は合理的に読むことのできない書き方を試みているとみられる。ひとえに女主人公の神秘的誕生を強調するために。」とは説かれる(藤井, 1985)。
- (12) 「土をあまた具して」も「土」を多く「伴って」の意で、直ちに「武士がたくさん登った」と言い換えてよいわけではない。
- (13) 当該箇所梗概として、『学校図書』には「この後、帝は、その手紙とつぼの薬を、天に最も近い富士の山頂で焼かせてしまいました」(203頁), 「駿河の国にあんなる山の頂」(富士山頂)で燃やしてしまいます」(206頁)とあり、『三省堂』には挿絵の説明文として「かぐや姫が献上した不死の薬の入った壺を、帝はかぐや姫のいる天に最も近い富士山の頂上で焼くように命じる」(39頁)とあって語源には言及されない。『教育出版』の場合は、「落胆した翁と帝、そして姫から渡された不死の薬はこのあとどうなったのでしょうか。『竹取物語』の現代語訳を載せた本で調べてみてください」(47頁)と学習者の意思に委ねられる。
- (14) 室伏信助訳注『新版竹取物語』(角川文庫, 平成13年<2001>刊) 64頁。同訳・注『竹取物語』(全対訳日本古典新書, 昭和59年<1984>, 創英社刊)にもほぼ同文の注がある。
- (15) 雨海博洋訳注『竹取物語』(旺文社文庫・対訳古典シリーズ, 昭和63年<1988>刊) 155頁。
- (16) 三谷榮一著『竹取物語評解 増訂版』(昭和31年<1956>, 有精堂刊) 319頁。なお、ここまでの研究史の要点整理は出雲 (2010) に拠るところが多い。
- (17) 高橋亨は「ことば遊びは、必ずしも正確に対応しなくてもよいから、想定可能な範囲でずらしたのだと考えておきたい」として「土に富む」説を認める(『竹取物語 大和物語』日本の文学古典編5, 昭和61年<1986>, ほるぷ出版刊。142頁)。「武器の意から、それをを用いる兵士の意となる」と用例に拘泥しない立場もある(野口元大校注『竹取物語』前掲)。
- (18) 新井本(古本)を底本とする中田剛直編『古本竹取物語』(昭和43年<1968>, 大修館書店刊)の当該

- 箇所、「『ふじ』は、『不死』によるが、多くの兵士（つはもの）なる『富士』をもかける」と注記され、通行本が尊重されている（36頁）。
- (19) 『竹取物語（全）』（ビギナーズ・クラシックス、平成13年<2001>、角川書店刊。49頁）。
- (20) 上坂信男訳注『竹取物語』（講談社学術文庫、昭和53年<1978>刊）54頁。
- (21) 野口（1979）は石作の皇子の段に「話の筋を叙するに急で、最小限の説明の労さえともすれば省きがち」な作者の姿勢を認めて「物語の原型を示すもの」と見なした。同様の捉え方であろう。
- (22) 新井本の方が辻褄が合うと見たのは、鉢が袋の中に入っていてその上に文が置かれている状態を想定したからであるが、この場合は袋の中にある鉢が誰にも見られていないことになる。したがって、袋の中にあるものが鉢であるかどうかはわからないままに話が進行するという矛盾が新たに生じている。
- (23) 堀内秀晃校注「竹取物語」（『竹取物語 伊勢物語』新日本古典文学大系17、岩波書店、平成9年<1997>刊）14頁脚注。
- (24) 野口元大校注『竹取物語』（新潮日本古典集成、昭和54年<1979>、新潮社刊）21頁頭注。
- (25) 片桐洋一校注・訳「竹取物語」（『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』新編日本古典文学全集12、小学館、平成6年<1994>刊）27頁頭注。
- (26) 新日本文学大系本の脚注には、石の鉢の光のことが初めて出るのが「やや唐突」と評される（14頁）。前もって仏の御石の鉢は発光するものであると説明しなかった不用意かもしれない。
- (27) たとえば『日本名作絵本 [特装版]』16（平成5年<1993>、ティビーエス・ブリタニカ刊）には「かぐや姫は、そのはちを見て、すぐに、にせものだと分かると、それをすてたまま、石つくりのみことは、口もききませんでした。」とあるだけで、和歌は詠まれない。
- (28) 教科専門の研究成果を教科教育実践に結びつける観点からは、『竹取物語』関係に限っても近年蓄積されつつあるように思われる。菊地（2003）、久保木（2004）、竹村（2002）、中嶋（2010）、福田孝（2013）など。これらを教科内容学の成果として一括する（リストを作成する）ところから始めるできであろう。

参考文献

- 安藤重和、「竹取物語の難題提示をめぐって」、『日本文化論叢』（愛知教育大学日本文化研究室）、第19号、p.17-25、（2011）
- 出雲朝子、「『竹取物語』末尾の富士山地名起源説話について」、『汲古』、第58号、p.7-14、（2010）
- 奥津春雄著、『竹取物語の研究—達成と変容—』、翰林書房、（2000）

- 金関丈夫、「竹取物語『富士』の口合」、『帝塚山大学論集』、第1号、p.1-26、（1970）
- 菊地奈樹、「入門期としての中学校古典教育を考える—『竹取物語』『枕草子』『徒然草』和歌教材で古典に親しむ態度を養うために—」、『言文』（福島大学国語教育文化学会）、第51号、p.64-85、（2003）
- 久保木寿子、「絵本・絵巻と物語表現—『かぐやひめ』の背景—」、『白梅学園短期大学紀要』、第40号、p.1-12、（2004）
- 小谷野純一、「作品の秩序への対応ということ—『竹取物語』冒頭をめぐって—」、『解釈』、第34巻第6号（通巻399集）、p.5-6、（1988）
- 島内景二著、『初期物語話型論』、新典社刊、（1992）
- 鈴木日出男、「『竹取物語』の本性—異界と人間をめぐって—」、『文学 隔月刊』、第2巻第6号、（2001）
- 妹尾好信、「翁は竹を切ったか—かぐや姫発見場面の解釈—」、『解釈』、第34巻第4号（通巻397集）、p.5-6、（1988）
- 高橋亨、「竹取物語—境界性と異化のテクスト—」、『国文学解釈と教材の研究』、第31巻第13号、p.12-19、（1986）
- 高橋亨、「ファンタジーとしてのかぐや姫」、『季刊iichiko』、No.5、p.17-25、（1987）
- 竹村信治、「翁の物語としての『竹取物語』—“『古典』に親しむ”のために—」、『国語教育研究』、第45号、p.68-81、（2002）。同著『言説論 for 説話集論』（笠間書院、2003）に再録。
- 中嶋真弓、「小学校国語教科書教材「かぐやひめ」採録の変遷」、愛知淑徳大学文学部紀要『学び舎—教職課程研究』、第5号、p.12-26、（2010）
- 仁平道明、「『月のみやこ』—『竹取物語』の異空間」、『国文学解釈と鑑賞』、第71巻第5号、p.47-55、（2006）。同著『物語論考』（2009年、武蔵野書院刊）に再録。
- 野口元大、「解説—伝承から文学への飛躍」、同校注『竹取物語』、新潮日本古典集成、新潮社、（1979）
- 福田景道、「不老長寿の意義と物語の世界—竹取の翁と夏山繁樹—」、『福祉文化』（島根大学教育学部福祉文化研究会）、第1号、p.35-46、（2001）
- 福田景道、「言語コミュニケーションと日本古典文学史教育」、『島根大学教育学部紀要』、第44巻別冊、p.65-71、（2011）
- 福田景道、「日本古典文学教育と教科内容学」、『島根大学教育学部紀要』、第45巻別冊、p.19-25、（2012）
- 福田孝、「古典教材としての『竹取物語』」、『国語科教育研究』全国大学国語教育学会第125回広島大会研究発表要旨集、p.369-372（2013）
- 藤井貞和、「かぐや姫—竹取物語主人公の誕生」、『国文学解釈と教材の研究』、第30巻第8号、p.54-60、（1985）
- 榎原茂、「教員養成課程における教科専門の役割—『教科内容学』論によせて—」、『島根大学教育学部紀要』、

第45巻別冊, p.13-18, (2012)

増井三夫, 「教員養成としての教科内容学 (教科専門) 研究の歴史」, 『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』, 風間書房, p.9-30, (2009)

増井三夫・西園芳信, 「教科内容学研究の現在と可能性」, 『教科専門と教科教育を架橋する教員研究領域に関する調査研究』, 平成22-23年度文部科学省先導的の大学改革推進委託事業研究成果報告書, 三大学研究協議会編集, 上越教育大学発行, p.28-57, (2011)

三谷榮一著, 『竹取物語評解 増訂版』, 有精堂, (初版1948, 改訂版1956, 増訂版1988)